

# 読書意欲・読書習慣の形成過程

## —子ども時代の読書を中心に

汐崎順子(慶應義塾大学大学院)【shio-js@slis.keio.ac.jp】

### 1. 研究の背景と目的

現在は情報化社会の進展の中、多種多様なメディアの情報を読み取る基本的な能力を培うものとして、読書がより重視されている。とりわけ、読書への意欲を持ち、その習慣を発展させていく子どもへの各種教育的な働きかけが積極的に展開されている。しかし一方で、2006年度のPISA調査では、わが国の小中学生、高校生の読解力の低下が示され<sup>\*1)</sup>、これと密接に結びつくものとして、若年層の読書離れ、活字離れへの危惧が高まっている。家庭、地域社会、学校などでの各種読書推進活動の内容と成果の検証、子どもの発達と読書に関する研究が求められていると言えよう。

現在、わが国には子どもの読書の実態を明らかにするための各種調査が存在する。代表的なものとしては毎日新聞社と学校図書館協議会が共同で1954年から実施している「学校読書調査」があげられる。これは全国1万人以上の生徒(小4～高3)を対象としたもので、調査項目ごとに結果を経年で比較することもできる<sup>\*2)</sup>。例えば2007年度調査からは、中学生の不読率の大幅な減少が報告された<sup>\*3)</sup>。

立田らは、日本語能力の低下を全世代の問題と捉え、小学生から成人まで約4,300人を対象に読書調査を実施した(2005-6)<sup>\*4)</sup>。

こうした大規模な量的調査では、その時々に対象とした各世代の読書の状況を数字で断面的に見ることができる。しかし例えば先の「不読率の低下」は、個人、すなわち一人一人の読書の経歴を明らかにするものではない。

筆者は、過去の研究で「子ども時代(幼児から小学生)の読書」を質量両面から検証することを試みた<sup>\*5)</sup>。その結果、量的調査(質問紙調査)では顕在化しない要素が、質的調査(フォーカス・グループ・インタビュー:以下「FGI」)で見出せることが分かった。また、参加者と兄弟(姉妹)との間で、読書への嗜好の相違も見られた。これは同じ環境にあっても、各自の内的要素により、読書への向き合い方が異なることを示唆している。個人的な行為である読書の研究では、個々の事例を継続的に詳細に追う

質的側面からのアプローチも必要である。

今回の研究では、質的調査(FGI)に焦点を絞り、各外的要素に対する各自の行動、姿勢及び意識の共通点と相違点を検証すること、読書意欲(本が好き、読みたいという気持)と読書習慣(自ら本を読む行動)の形成過程の特徴的なパターンを示すことを目的とする。

### 2. 研究方法

#### 【対象者】

本研究では、1980年代生まれの男女23人に対してFGIを4回実施した。まず「子ども時代に読書好き」の男女10人(男女各5)を集め、男女別に2回(2006)、次に「子ども時代に読書好き」という条件なしで男女13人(男4女9)を集め、男女一緒に2回(2007)行った。1980年代生まれを対象にしたのは、一連の読書経験を追うため、近年の子どもへの読書の働きかけ(家庭や地域)の動きを検証するためである。

結果として過去および現在において「読書が好きだった、好きだ」、という意識を持つ者が大半(18)であった(「以前も今も自分が特に読書好きだった、好きだとは思わない」という意識の者(3)、「以前は好きだったが今はそうではない」という意識の者(2))。これより本研究では主として「読書が好き」、という意識を持つ標本を中心に論じていることを予め断っておく。

#### 【FGIの実施】

FGIは、参加者同士のテーマに沿った自発的な発言の中から様々な要素を見出していく手法である。本研究でも予め各自の読書経験と読書への意識を語ってもらうことを説明し、その後は原則として参加者間の自由な発言を促した(各回の所要時間は約2時間)。インタビューでは音声と画像の記録をとり、実施後、各記録をもとに会話の逐語録を作成した。

#### 【分類の枠組みと分析】

読書という観点から環境を考えた場合、読書を後押しすると思われる(プラス)要素、読書から遠ざけると思われている(マイナス)要素、それ自体ではどちらとも言えない(中立的)要素がある。例えば、プラス要素は「親が読書

を奨励する」、「家庭に本が多い」、「近くに公共図書館がある」、マイナス要素はその反対、中立的要素は「親が漫画好き」、などである。

立田らは先の研究で、読書能力を形成する要因を内発的要因(興味、関心、知識、経験など)と、外発的要因(家庭や学校などの読書環境)の二つの面から捉えている\*4)。

しかし、実際は各要素をどう受け止め、どう行動する(しない)かは各自異なる。マイナスと思われる要素を、プラスの要素として受け止めて読書への意欲や行動に結びつける場合もある(図 1:A)。これに加え、周りに存在する諸要素とは関係なく、読書への意欲と行動が発生する場合もある(図1:B)。

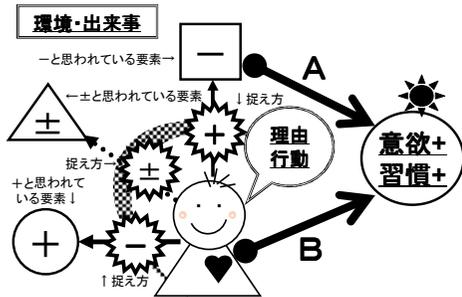


図1. 読書意欲・習慣形成の諸要素と捉え方の例

本研究では、環境など外的要素と個々人の内的要素(性格、感情など)の結びつきを見ることが重要であると考え、読書意欲と習慣に関わる要素を、まず1)環境と出来事、2)理由と行動、の側面から捉えることとした。1)は物理的環境、2)はその環境をどう受け止めたのか、どう行動したのか、という項目である。さらに第3の項目として、3)意識と結果、を加えた。これは、読書への内外の意識、読書が各自にもたらした影響、読書が何につながったのかという項目である。この視点に基づいて分類項目表(表1)を作成し、分析対象とする発言を抽出、

表1: 発言の分類項目表

1. 環境と出来事: 物理的・環境的要素
1.1 環境: 人・場所
1.2 出来事: 出来事
2. 理由と行動: 精神的・主体的要素
2.1 理由: 読んだ(読まなかった)理由・行動の理由
2.2 行動: 対象・読み方・取り組み・時期・記憶など
3. 意識と結果: 読書への意識・各自にもたらされたもの
3.1 意識: 意識(内外)・イメージ
3.2 結果: 結果・評価・影響・行動・意欲など

分類して、各項目別、参加者別に検証した。

### 3. 結果と考察

ここでは明らかとなった主たる結果を示す。重要な発言については、参加者を示す記号(A~W)と、発言番号を付して適宜述べる。また2.で述べた「一般的に読書に対してプラス、(マイナス、中立的)と思われる要素」を他と区別するため、それぞれを『一般的◇(◇, ◇)要素』と表すことにする。

#### 3.1 各項目で見られた特徴

##### 3.1.1 環境と出来事

##### 【家庭および社会の読書環境】

読書環境における『一般的◇要素』では、肉親の読み聞かせ(15)、近くに公共図書館があった(10)、学校図書館に司書(教諭)がいた(14)などが多かった。この世代の子ども時代、家庭での読書への取り組み、公共図書館、学校図書館の整備が進んでいたことが分かる。

「子ども時代、読書が好きだった」20人中16人には兄弟(姉妹)がいたが、うち11人は「兄弟は読書が好きでなかった(兄弟が複数の場合、両方もしくはどちらか)」と答えた。これは、同じ読書環境(家庭)にある兄弟間でも、読書の嗜好がしばしば異なることを示している。

##### 3.1.2 理由と行動

##### 【読書環境における『一般的◇要素』と理由・行動】

3.1.1 で示した『一般的◇要素』を「読んだ理由」、「行動の理由」に関する発言から見ると、公共図書館利用の理由として、「近くにあったから」と発言した者が多かった。一方、遠いという条件でも利用したTには「探検みたいな感じで」(T76)(好奇心)、「図書館に行けば、(自分の読みたい本があるかな〜)」(T78)(期待感)、「図書館のあの空気好きですもん」(T80)(好感)、という内的要素との結びつきが見られた。

『一般的◇要素』をマイナスや中立的なものとして捉えた者もいた。「小さい頃からイベントに参加するっていうのは極端に嫌う性格だった」(S61)(お話会)、「母親はしたって言うんですけど、私の記憶がないんですよ。うまくなかったのかな」(E6)(読み聞かせ)、などである。

##### 【読んだ理由】

「面白いから読んだ」(G105)、などの「読書の楽しさ」以外を理由とする発言があった。

●友人不在:《あんまり友達がいなかったので・・・ひたすら本を読んでました》(O25) ●運動が苦手:《運動できないから・・・その分本ばかり読んでたみたいなの》(G93), ●一人が好き:《友達とかとつきあってるのが嫌いで》(C33), ●現実逃避:《現実と違う世界・・・学校に行っても面白くなかったから・・・違う世界に入っていく感じ》(Q39), ●読書以外の達成感:《貸出しノートに名前がたくさん書けるのが嬉しかった》(F77), ●周囲の評価:《ほめられるのが好きで》(C17), 同時にCはこれを《中学校に入ると基本的に本を読んでほめられることがないので、読まなくなった》(C17)と、本を読まなくなった理由にもしていた。●学習目的:《(読書は)勉強、宿題どっちかです》(U76)。

### 【興味をひかれた本】

内容、すなわち好きなジャンルや作者の本を手取る以外に、以下の発言もあった。

●偶然:《読んだ本の隣にあった本を、たまたまそこにあったから》(R40), ●外見:《表紙の絵の綺麗さで》(L82), 《タイトルがいい本はやっぱいいと思ってたので、タイトルに惹かれて》(M61), 《字が大きいのは嫌だった。馬鹿にされてるって感じ》(V83), ●自分との接点:《アルセーヌ・ルパンの813っていうのを・・・8月13日が誕生日なので》(W54), 《自分にそっくりだと思って・・・最後に出てくる女の子の絵が》(C29), ●人の推薦:ここでは《友達を読んで「これ面白いよ」って言ってくれたのを》(D57), 《あまのじゃくだから、皆が読んでる本はあんまり》(O59)など、行動が分かれた。

### 3.1.3 意識と結果

#### 【「読書」のイメージと参加者の姿勢】

読書に対する内外の意識を示すこの項目は、先の「読む理由」と密接に結びつき、各自の読書の後押しとなる、あるいは読書から遠ざかる一因となることも多い。例えば読書好きの子は「暗い」、「運動が苦手」、「ガリ勉」などの発言が多かったが、これは各自の性格や能力、行動を否定的に捉えたものである。《本読んでもといじめられたりする子とか結構多かったかな》(O6), という具体的事例の発言もあった。

一方でこれらの否定的なイメージが、逆に読書への行動に結びつく事例も見られた。

Qは、《言われても別に気にせず読んでいました》(Q8)と述べ、《結構暗いというイメージ

がついたみたいで、ひたすら本ばかり読んでた》(Q9), 《孤立していたので、だからむしろ逆に読書にはよかった》(Q10)など、「暗い」、「孤立」という『一般的⇨要素』を読書への肯定的なエネルギーに変えていた。

Gは、読書より運動を重視する教師の姿勢に、《運動してない子は「駄目な子」だった・・・運動も嫌いでしたけど、そういうことを堂々と言う、そういう状況が嫌いだったんで》(G112)と反抗心を示し、読書への意欲を強化していた。

### 3.2 読書意欲、読書習慣形成のパターン

成長とともに、外的要素、とりわけ社会的環境は(「図書館が近い」など、不変のものもあるが)、大きく変化する。併せて各自の内面(考え方や意識)も変化する事が多い。しかし双方の変化の中でも、図1で示した行為は常に繰り返され、各々の読書の軌跡を描く(図2)。

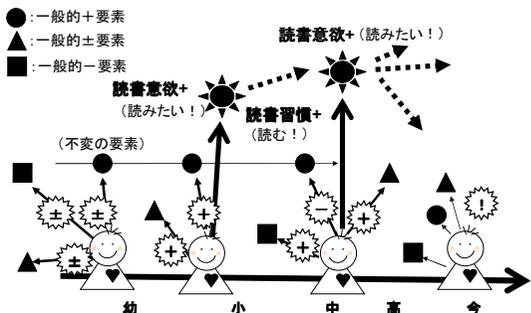


図2.各発達段階における各要素と読書意欲・習慣の例

各自の読書意欲や習慣が、いつ、どのように生まれ、どんな軌跡を描いて現在に至ったのかを見出すには、各発達段階における各々の外的要素と受け止め方を検証する必要がある。以下特徴的だった4パターンを示す。

#### 【『一般的⇨要素』が強く・読書が好き】(A)

読書好きで20年以上のボランティア活動歴の母親を持つAは、《生まれる前から、「本を読まされる」っていうことが運命として位置づけられていた》(A5)と発言した。《ちっちゃいころから・・・お話の世界に入っちゃって》(A20), 《字は読めないんだけど全部暗記して》(A13), 《小学校で好きで、中学校でも好きで、高校でも好きで、読み返しとかしているんですよ》(A10), と幼少時に読書意欲と習慣が形成され、その後も継続していることを示した。

《お菓子を食べるのを忘れて》(A14), という読み方は、《今もご飯食べるのを忘れちゃう》

(A16)と、現在も変化していない。他に《同じ本が好きで色々話す》(A6)、姉の存在がある。

運動が苦手、という要素は《本当に好きじゃなかったんですよ外で遊ぶのが。だからおうちで本を読んだ・・・集中していきやすかった》(A32)、と読書へ向かう動機として語られた。

さらに《高校でまた他人の、他の方(司書教諭)の影響を受けて本を新しく読みたいと思うようになりまして》(A3)と、読書意欲が高校時代に強化された発言もあった。Aは、読書を《全ての基盤》(A32)、と位置づけている。

#### 【『一般的⇨要素』が強いが・読書が好き】(L)

《本は本当に好きなんですけど、すごい読む時期と全然読まなくなる時期ってそういう波があつて》(L1)と発言した L は、幼少時は《両親が本を読んでいる所は見たことがない・・・兄弟もいないので・・・読んでもらうとかいうこともなく》(L20)、小学時代は、《怖い司書の先生がいて。読書をしてる時一言でも話すとうるさいぞって怒鳴られて》(L37)、《(公共図書館は)近くになくて・・・初めて行ったのが中学に上がった時》(L2)、という読書環境であった。

《何で普通に本を読むようになったのかがちょっと不思議だなんて・・・この本買ってって言い出すようになったのが5、6歳位》(L21)、との発言から、読書意欲の形成時期は推察できるが、理由を明らかにすることはできなかった。

#### 【『一般的⇨要素』が強いが・読書が好きではない】(P)

《あまり「本が好きです」っていう感じではない》(P24)、と発言した P の母親は文庫の主宰者で、家庭には本が沢山あり、幼い頃より積極的な読書への働きかけを受けた。しかし、《生まれる前から読み聞かせをされていたと思うんですけど・・・記憶はない》(P12)、と述べた。

本人自身は一定水準以上の読書意欲を持っていないと思っているが、他の参加者との発言から多くの本を思い出して発言した。つまり子ども時代に一定の読書習慣があったことが分かる。この事例からは、「読書が好き」という基準には個人差があること、Pは、自身の読書習慣と読書意欲を結びつけて考えてはいないことが示唆された。

#### 【『一般的⇨要素』が強く・読書が好きではない】(U)

U は家庭、特に父親の影響を強く受けてい

た:《父が本を読むようになったのは年をとってからだ》(U53)、《それが色濃くて》(U76)。

さらに「読書をする子は暗い、いじめられる」、というイメージ(『一般的⇨要素』)に《人と違うっていうの嫌》(U24)、という内的要素が結びついている。《やりたいからじゃなくてやらなきゃって所から始まって・・・与えられない限りはやらない》(U6)、《紹介してもらいたいな。だって自分から読もうってあんまり思わないから》(U59)からは、目的を達成するための読書、受動的な姿勢が見える。読書意欲と積極的な読書の習慣は形成されずに現在に至ったと言える。

#### 4. まとめ

本研究では、一般的に読書を促す、と見做されている各『一般的⇨要素』が、実際各自の読書意欲、習慣の形成に結びつか否かは、受け止める個々人の内的要素に左右される様子を明らかにした。『一般的⇨要素』、『一般的⇨要素』が+の要素になる事例も示した。

読書が好きという気持ち(意欲)と、積極的に読書をする行動(習慣)の関係や「読書が好き」という基準に関する個人差を検証する研究、「読書が好きではない」と認識する者を対象とする研究などが今後の課題である。子ども時代の読書の諸要素を明らかにすることは、効果的な読書環境の整備、読書推進の働きかけの方向性を見出すことにもつながるだろう。

【謝辞】 本研究は、科学研究費補助金(基盤研究(C))「公立図書館における児童サービスの意義及び理念の総合的研究」の一部です。調査にご協力くださった皆様に感謝いたします。

#### 【注・引用文献】

- 1) 国立教育政策研究所編。生きるための知識と技能3: OECD生徒の学習到達度調査(PISA) 2006年調査国際結果報告書。ぎょうせい、2007、308p.
- 2) 読書世論調査 2008年版。毎日新聞社、2008、115p.
- 3) 全国 SLA 研究・調査部。第53回学校読書調査報告。学校図書館。No.685、2007、p.12-35.
- 4) 立田慶裕。生涯にわたる読書能力の形成に関する総合的研究: 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書。国立教育政策研究所生涯学習政策研究部、2007、266p.
- 5) 汐崎順子。子ども時代の読書・質問紙調査およびフォーカス・グループ・インタビューからの分析。三田図書館・情報学会研究大会発表論文集: 2006年度。2006、p.21-24.